

ソ連領パミール・レーニン峰 (7134m) (1987年)

パーティー

- L 渡辺 豊(OB) 87年卒
AL 岡島 伸浩 (5)
M 米山 悟 (4)
沢柿 教伸 (3)

ソ連邦政府、国家スポーツ委員会主催のパミール国際キャンプへ参加し、レーニン峰を目指した。
日本からは、コムニズム、コルジェネフスカヤ地域をあわせ6隊が参加し、東京スキー山岳会、關
魂福島パミールタッグチームの方々とは、親交を深めた。

行動記録

- 7月28日 成田発 モスクワ着
29日 モスクワ発(飛行機)
30日 キルギス共和国 オーシュ着、バスにてアチクタシのB.C着(3,600m)
31日 B.C.の裏山ペトロフスキー峰を4000mまで登る。
8月1日 行動開始。探検家の峠を経て、レーニン氷河の4,000m附近を往復。
2日 岡島、米山、C₁(4250m)設営。渡辺、沢柿、不調の為、休養。
3日 岡島、米山、峠のデポ回収。渡辺、沢柿、不調で休養。
4日 渡辺、沢柿C₁着。米山、昨夜より体調崩し、この日夕方から4人でB.Cめざして下る。氷河から
モレーンに移る所(4000m)にて米山、渡辺を残し、岡島、沢柿B.Cに伝令に下る。
5日 B.C着は0時頃。岡島は医者とトレーナーを連れて米山のところへ戻る。午前4時頃。酸素を
与え午前10時頃へりて米山救出される。岡島、渡辺、B.Cへ。米山は以降、オーシュで入院生活。
6日 3人でC₁入り。
7日 渡辺、岡島 C₂(5300m)荷上げ。5400mを往復。沢柿、膝を痛めて休養。
8日 3人で5000m往復。渡辺、岡島C₂泊。
9日 渡辺、岡島C₃(6000m)往復。沢柿C₂入り。
10日 岡島、沢柿、ラズジュリナ峰(6100m)直下まで往復。渡辺C₂で休養。岡島C₁に下る。
11日 渡辺、沢柿、ラズジュリナヤ峰直下まで往復。その後C₁まで戻る。
12日 3人共C₁で休養。
13日 3人共C₂入り。
14日 3人共C₃入り。
15日 ピークアタック。岡島と沢柿、14時に6時間半かかって頂上。渡辺は約1時間の遅れで、他のロ
シヤ人達と頂上に着くが高度障害の為、ロシヤ人トレーナーのアドバイスにより6900m付近でビバ
ークする。
16日 天候悪化で視界なく動けず。一時視界が利いたので少し移動した。
17日 天候回復。C₃に到着。岡島、沢柿はC₂徹収しC₁まで下る。渡辺C₃にてトレーナーと共に泊る。
18日 岡島、沢柿はC₁を徹収してへりでB.Cへ。渡辺トレーナーとC₁へ下り、へりでB.Cへ。
19日 B.C出発、オーシュ着。米山と再会。飛行機でモスクワへ。

20日 モスクワ観光。
21日 モスクワ発
22日 成田着。

肺水腫

C₁で最初の仕事は、峠のデボの逆ボッカであった。長い氷河を下って峠に登り返すのは気が滅入る。

峠に辿り着くまでには2人とも悪いペースではなかった。BCから上って来た外人に聞くと、今日は日本人は来ないらしいのでC₁に戻る。帰りの氷河では米山がかなり遅れたが、高所では普通の事だと思った。その夜から彼は咳込むようになった。

8月4日の朝。米山は不調で、今日は下る準備をした。彼は昨年ネパールで5000mを歩いているので、肺水腫に罹るとは思いたくなかったが、黄色の痰が気掛かりだ。いっしょに下ろう、と促すが腰が重い。

医者がいるかロシア人の通訳に尋ねると、きょうC₁に来る予定らしい。医者を待つことにした。肺水腫ならばヘリで降ろしてもらえらるだろう。

落着かぬ半日を費やした。米山は岩に座ったり、リハビリみたく歩いたり。やがて渡辺と沢柿がキャンプに着いた。2日ぶり。元気そうだ。

ヘリがやって来て、どこにいたのか完全にくたばって伸びた外人が慌しく運ばれ、今来たヘリが連れ去った。

医者を呼びに行った。肺から流れ出る痰に混じる血。肺水腫と診断された。きょうはもうヘリが来ないので連れて下山しろと言う。医者は山登りに来ていたアメリカ人であった。

残り僅かの酸素を吸って、4人で下り出したのは午後8時。日没まで1時間。平坦な氷河は自力で歩けたが、既に暮れた複雑なモレンの急登は、彼を背負う事も不可能と察する。午後10時、モレンの取り着きに彼と渡辺をツェルトに待たせて一そのところには福島のパーターが泊っていた一沢柿と岡島でBCに伝令に走った。

6時間後に、ロシア人医師とトレーナー3人を連れて米山の待つモレンに戻った。さぞかしうまい酸素であったことと思う。

「安眠中のドクターには気の毒だった。」などと、渡辺と冗談を言って喜んだ。夜明けの寒気に震えながら、ヘリを待った。(岡島記)

頂上アタックとピバーク

いよいよ頂上アタックの朝が来た。起きてみると、強い風が吹いている。いつもの穏やかな朝に比べるとちょっと違うような気がしたが、稜線の朝とはこんなものかと納得してしまった。過去の記録や、先に頂上まで行っている東京スキーの人の話から、頂上までは8時間ぐらいかかりそうだった。当初は暗いうちから歩きはじめるつもりだったが、風が強いので日の出から出発することにする。時間切れでC₃に着けないことも予想してピバーク可能装備で行く。

ようやく東の空が白みはじめ、アタックに出発する。6300m迄は急な登りである。強い風に体をあずけながらひたすら登る。固くて快調である。この斜面を登りきると稜線は東に向きを変えてやや平らになる。ここまで約2時間。まずまずのペースだ。しばらく行くとC₄にテントがあり、主は出発したのかいる気配はなかった。行く手に次の急な斜面が見える。良く見ると先行している人がいる。トレースは期待できそうだ。

ガラ場あり、雪原ありのまるい尾根で、遭難者のレリーフをいくつか横に見ながら登る。このころからリダーの渡辺が遅れだす。斜面のところどころにデボ旗をうつ。2つ目の斜面を登りきると、南西の視界が開け、コムニズムやバキスタン方面の急峻な峰々が望まれる。3つ目の斜面は結構急で、抜け口がちょっと

いやらしい。下りはバックステップしそうだ。

ここを抜けると6800~7000mのプラトーに入る。ほとんど平坦な大雪原である。視界は良好で、ピークとおぼしきあたりが遙かかなたに見渡せる。斜面の登りにさしかかる渡辺に先を行くことを告げ、岡島と僕は先を急ぐ。僕は雪原を横断し終わったところに、岡島はそこからしばらく登ったところにそれぞれザックをデポし、空身で、頂上のレーニン像を目指す。もう、どこでも頂上だと思えるほど平らなところだ。さすがに7000mは苦しい。まだかまだかと思っているうちに、ようやくレーニン像のある岩が見えた。僕は、帰りの体力を考えて、岡島にカメラを預けてここから引きかえす。岡島はレーニン像で写真を撮って引きかえす。

岡島のザックのところで待っていた僕は、ようやく追いついた渡辺に会った。引きかえしてきた岡島はさらにその少し上で、消耗ぎみの渡辺と会う。渡辺はもう少し登って引きかえすことを告げ、ロシア人のトレーナー3人と一緒に行ったらしい。頂上に着いた渡辺は、高度障害のために正常な歩行が困難になり、トレーナーに支えられて下りてきた。僕のザックのところで合流した3人は、トレーナーから今夜はここに滞って、渡辺の体力の回復をはかるアドバイスを受けた。

ビバーク体制に入ろうと穴を掘るが、すぐに地面が出てしまう。1時間ほどツェルトをかぶって渡辺を寝かせた。この間、岡島と僕は、まだ明るいし、プラトーぐらいは抜けておいたほうが良いのではと話し合う。再び歩き出そうとしたが、一度横になった渡辺はかなりふらつくので、仕方なく泊まることにする。この夜から風が強まり、雪も降り出した。翌朝も風雪が続き、視界が全くないので、プラトーを抜けることができない。朝と昼の定時交信でコンタクトを試みるが、むこうの聲がかすかに聞こえるだけで、通じているのかどうかは分からなかった。夕方の交信で一方向的に送信したあと、やや視界がひらけてきたので出ることにする。トレースはすっかり消えていて、100m前後の視界の中をデポ旗をあてにしなが、岡島と沢柿でラッセルしながら進む。渡辺はフラフラするが、なんとか1人で歩ける。プラトーを半分通過したところで再び視界がなくなり、良いルートが見つからないので再びビバーク体制に入る。翌朝ようやく天候が回復し視界も開けた。プラトーをぬけたところで下を見ると、数人が登ってくるのが見えた。我々を心配して登ってきたトレーナー達であった。彼らは、我々が自力で下山できることを知ると、ピークまで行くと言って行ってしまった。今夜は、我々のテントに泊まるということだった。明日が最終下山日であるので、C₁やC₂の撤収を急がねばならない。渡辺をC₃に残し、後はトレーナーにまかせて、岡島と僕は今日中にC₁に下ることとした。

次の日の朝、C₁の回収ヘリがやって来た。渡辺が下りて来るまで待つつもりでいたが、ヘリでBCまで下ろしてくれるというので、先にBCに下って待つことにする。BCに着くと、他の日本隊の人が、心配してヘリポートまで出迎えに来てくれていた。我々がビバークしている間の天候は、このキャンプの期間中でも最悪のほうだったことを、ここで初めて聞かされた。約3時間後、他国の消耗した人々を運れたトレーナーと一緒に渡辺がヘリでBCに到着し、めでたく3人がBCにそろった。皆の顔が風船のようにふくらんでいたのはいうまでもない。

(沢柿記)

〈二つの問題に関する総括〉

○肺水腫について

岡島、米山には高所経験があり、4,000mの順応の壁に関しては楽観的であった。だが、具体的にはC₁設営の翌日には休みをとるなど、高所の最初の壁である4,000mこそ慎重さが必要であった。新しい高所の順応を獲得してすぐ高度を下げると肺水腫になり易い、という説を心得てはいたが、C₁から峠とりつきまでの数100mの高度差の事であろうか。複雑な人体生理には謎も多いが、とりわけ最初の壁である4,000mでの順応には、それが高の順応よりも時間をかけるべきである。又、C₁で症状を示した後、周りの情報に振り回されて下山が遅れたのもバミールキャンプならではのデメリットである。逆に、バミールならではのヘリコプター救出

であった。

○ピバークについて

4,000mの上の高所の壁に6,000mがあるといわれる。当計画では、6,000mのC₃から長距離にして高度差1000mの頂を往復しようというものである。6,000mの順応は8/10~11に完成させておくつもりが、渡辺が不完全であった事になる。ピークアタックの日3人の行動がばらばらだったという事も、帰国後の反省で、Roomに不安感を与えた。当日の、ピバークすべしというトレーナーの助言を唯受けとめた、等の判断も、通常の山行ではあり得ない判断である。高所で消耗した者は、そこにとどまればとどまる程、悪くはなっても、回復する事は無いのだから。

パミールキャンプは救援体制は整っているが、この様に他のさまざまな影響も受けなければならない山登りである。北海道ではほとんど人に会わない山行をしている我々にとってその様な山登りは、なじみ難いものであるが、我々4人の様な未熟者が7,000mの高所に到る事ができるのも、パミールならではの事情である。高所登山を目指す者にとっては、パミールは得るものの多い所である。ここでは、長いキャラバン、機動性に欠く大組織のパーティー、めんどろな事前交渉が無いかわりに、探検魂、ロマン、terra incognitaも無い。だが、スポーツとして整ったソ連の登山界では、自分の弱点を全く客観的に見つめ直す事ができる。我々の弱点は、あまりにも明確に、示されたわけである。 (米山記)



遠見尾根 4月

